

日蓮聖人遺文に於ける國神勸請義

望 月 歡 厚

一、緒 言

此の論は「日蓮聖人大曼荼羅に於ける國神勸請の座配」(大崎學報第九十二號所載)のつゞきとして起草した。讀者の併せ讀まんことを希望して緒言に代へる。

二、遺 文 の 列 示

二神勸請義を求むべく煩雜を顧みず關係遺文を年次を遂うて列舉しその意義を研討して見る。蓋し勸請意義を求むべき基礎であるからである。

(一)垂迹法門(康元年)
(一二八)神明は正直の者の頭に住給也、……今時の垂迹和光は是皆本地釋迦如來の化身也。(文)

此書には「大明神」の語もあるが未だ二神の名を出してゐない。一班的に神佛の本迹觀であつて、佛教一般の舊説を繼紹したに過ぎない。(遺文二七四、南都奏狀、山門奏狀等參照)又正直の頭に住むの思想は聖人の前後を通じて換らざるところで、「戒法門」(二七)に五戒を以て「萬物之母萬神之父」とすると相通じ、神を以て正とし徳と

するものである。この書、偽書の説あるも勸請義に關しては特別の意義を有たない。

- (2) 「立正安國論廣本」(文應元年三六七年) 法然聖人選擇現在也、以諸佛諸經法華經教主釋尊諸菩薩諸天天照大神正八幡等載捨閉閣拋之惡言其文顯然也。因茲聖人去國、善神捨所、天下飢渴世上疫病等。(文)(真蹟在東京本願寺)

遺文に於ける二神の名はこの書を以て最初とするやうである。但し廣本にのみあつて「安國論」(三八九)には「以諸佛諸經諸菩薩諸天等」載捨閉閣拋「其文顯然也」となつてゐる。略本と廣本との成立問題と關聯して論ぜらるべきであるが、廣本を弘安年中の再治とすれば二神を出せるは當然のことであり、廣本を草案本とすればこの書を以て二神の最初とする。この點は後の再論に譲つて、所載の意を案ずれば、連文に「所詮國土泰平天下安穩自一人至萬民所好也所樂也、早止一闢提之施一切謗法之根……」の文によりて、二神を日本國家の守護、若くは正法法華擁護の神とするのである。

- (3) 「行者佛天守護鈔」(弘長二年四三〇年) 法華經をたもつ人をば、釋迦多寶十方の諸佛梵天帝釋日月四天龍神、日本守護天照大神八幡大菩薩、人の眼を於しむがごとく……守り於ぼしめし……(文)

此書は法華持者の守護をいふのであるが、二神に特に日本守護の四字を置きたるに注目すべきである。安國論廣本を弘安の再治とすれば、二神の名はこの書を最初とし且つ二神の神格を決定した最初である。併しこの書にも系年に異説があつて、錄外十五には文永元年に系けてある。しかし次の月水書も文永元年に系年すれば、全年全月全日のこの書を以て最初とするに防げない。但し遺文錄の系年に依れば弘長三年の持妙法華問答鈔(四七五)に八幡大菩薩、松尾大明神の名が出てゐるが、系年に就ては建治二年說、弘安三年說があつて決定的でない。大旨にさしたる關係がないから略して引かない。行者守護鈔は既に伊豆流罪中教機時國鈔の後であるから二神守護の思

想も決して不合理とは考へられない。

- (4) 「月水書」(文永元年 四八三) 日本國は神國也、此國の習として佛菩薩の垂迹不思議に經論にあひにぬ(る)事も多く侍る……此由を知らざる智者共、神は鬼神なれば敬ふべからずなど申す強義を申て多く檀那を損ずる事ありと見て候也。(文)

已下に此の國に生れたるもの神明に背くべからざる由を述べてゐる。垂迹云々は神佛の關係を述べたものではあるが明に本迹をいはない。此由を知らざる智者共とは、念佛の徒を指すことは、念佛者追放宣狀事(二七四)に南都奏狀を引いて「一葦如靈神事、右我朝本是神國也、百王承_レ彼_レ苗裔_二四海仰_レ其加護_一、而專修之輩永不_レ別_二神明_一、不_レ論_二權化實類_一、不_レ恐_二宗廟祖社_一、若憑_二神明_一墮_二魔界_一云云」等とあるによつて明である。聖人が法然の徒の神は鬼神也の説に同ぜずして「至_二權化垂迹_一者既是大聖也」の南都北嶺の舊義に隨つたことも明である。然るに我門の後輩が二神の所屬を論じて〇〇界に屬したのは祖意を失つた説である。この書に二神の名は出さないが「神國也」の語に聖人の國神觀を見るべきである。

- (5) 「六郎恒長御消息」(文永元年 五一五) 三千餘社の大小の神祇も釋尊の御子息也、全非_二阿彌陀佛子_一也。(文)

譬喻品の今此三界の文を釋して日本國の一切は釋迦の子也と釋し、阿彌陀に對して釋尊本師を主張したのであつて、二神の名を出さず、又二神の勸請義を論じたのでもない。但し一般的に佛神本迹の舊説の土台に立つことは勿論である。

- (6) 「女人成佛鈔」(文永二年 五三一)

此書に慧心僧都の加茂參籠とその時の明神御託宣とを載せてゐる。即ち法華經守護の加茂明神である。

(7)〔聖愚問答鈔(文永四年
五五四)〕

然るを日本は神國として伊奘諾伊奘冊尊此國を作り天照大神垂迹御坐して御裳濯河の流れ久して今にたえず。豈此國に生を受けて此邪義を用ゆべきや。(文)

又、二所三島熊野羽黑天照太神八幡大菩薩此等の名を一遍も唱ん人は、……無間には於つとも往生すべからずと云云。(文)

前文は法然の禮拜雜行を破する文、次文は唱名雜行を破する文である。神國、垂迹等の文によつて月水書の對念佛破と全同であつて佛神本迹義が顯れてゐる。但し二神の名は行者佛天守護鈔に次ぐものである。然しこの書は系年と俱に眞僞に異論あつて一定でない。諸神の順列に注意を要するものがある。所載の意義は日本守護の善神としてある。

(8)〔安國論御勘由來(文永五年
六〇五)〕

故叡山守護天照大神正八幡宮山王七社國中守護諸大善神不_レ衰_二法味_一失_二威光_一捨_二國土_一去了。(文)〔眞蹟在正中山〕

眞蹟現存の御書としては安國論廣本を除いてはこの書を以て二神所載の最初とする。此書は法然大日の念禪に對して枝山の「法華眞言」を以て正法として神佛の法味とし、これを以て國土守護の正法とする。故に「佛神彌作_二瞋恚_一破_二壞國土_一事無_レ疑者也」とも「爲_レ國爲_レ法爲_レ人」ともいはれてゐる。枝山守護の二神と記載されたるのも此の意によるもので、日本守護といふ(3)行者守護鈔(前出)と同意である。次の(9)宿屋書には明に日本守護とあるを照合すべきである。又善神捨國については、後來聖人門下の大なる異義とはなつたが、正直の頭に神宿るといふ一般的意義(垂迹法門一二八)「法華經の行者日本國に有るならば其所に栖み給べし」(60)諫曉八幡鈔二〇四〇(11)〔法門可申書六三一同意〕特殊的信仰から見、特に日本國の本尊建立の國土、閻浮廣布の根源たる國

土開顯の意義よりすれば、捨國を強調するは國土警覺の聖意であると斷するに躊躇しない。

(9)〔宿屋入道許御狀(文永五年 六〇七)〕念佛宗與禪宗等有御歸依之故、日本守護諸大善神作眞患所起災也。(文)

前文(8)御勘由來は法然大日を擧げ、この書はその所弘の念禪二宗を出す、彼には叡山守護といひ、是には日本守護といひ、彼には二神の名を出し、これにはたゞ諸大善神といふ。彼此比較して聖意の同じきを知るべきである。

(10)〔與北條時宗書(文永五年 六〇七)〕

此書眞偽の論はあるが、一乘擁護の神明とし、日本を神國とし、法華經を以て食とし、正直を以て力とするを神としてゐる。但し二神の名を出さず一般的に「天神七代地神五代神神其外諸天善神」とある。別段論すべき點を見ない。尙この書已下十通は常に同一價值に於て考へられるのであるが、與平左衛門尉賴綱書(六一〇)には「宜蒙善神之擁護者也」とあり、與北條彌源太書(六一一)には「天照大神八幡大菩薩等放此國故自大蒙古國牒狀來歟」とある。但し已下の諸寺諸僧に與へられた七通には神明に關する記載がないのが注目される。

(11) 法門可被申様之事(文永六年 六三一) 日本一州上下萬人一人もなく謗法なれば、大梵天王帝桓竝天照大神等、隣國の聖

人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるゝか。例せば國民たりし清盛入道王法をかたぶけたてまつり、結局は山王大佛殿をやきはらいしかば、天照大神正八幡山王等よりきさせ給て、源賴義が末賴朝に仰下て平家をほろぼされて國土安穩なりき、……世間の上下萬人云、八幡大菩薩は正直の頂にやどり給、別のすみかなし等云云。世間に正直の人なければ大菩薩のすみかまします。又佛法の中に法華經計こそ正直の御經にては於はしませ。法華經の行者なければ大菩薩の御すみか於はせざるか。但日本國には日蓮一人計こそ世間出世正直の者にては候へ……もししからば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給てはいづれの人の頂にかすみ給はん。(文)(眞蹟在中山)

此鈔には日本守護、正法守護、法華經行者守護の義が主流をなしてゐる。(8)御勘由來(六〇五)の下に述べた如く、捨國は日本守護の反顯的強調である。又世出二道に涉つて正直の頂に棲む八幡大菩薩觀は聖人に於ては一貫して變らざる神觀である。

- (12)〔善無畏三藏鈔(文永七年六四二)〕、天照大神正八幡宮等は我國の本主也、迹化の後神と顯れさせ給ふ。此神にそむく人此國の主となるべからず。されば天照大神を鏡にうつし奉りて内侍所と號す。八幡大菩薩に勅使有て物申あはさせ給き。(文)

日本國の本主としての二神を垂迹神とせられてゐる。この文段は釋尊の三德を主張する中の主德の段下である。

- (13)〔眞言七重勝劣(文永七年六五九)〕天照大神爲一座、八幡大菩薩爲第二座、是より已下の神は三千二百三十二社也(文)神の次第を明したのである。社數については餘所の御書には三千一百三十二社とある。(一二七・一九三・二〇三・二〇五七)三千二百三十二社とあるは此書だけのやうである。

- (14)〔秋元殿御返事(文永八年六六七)〕正月は妙の一字のまつり天照大神を歳之神とす。(文)

天照太神を主神とし、次には「梵天帝釋日月四天王等」を列してゐる。歳神としての義は三十番神思想と關係あるものとも考へられる。

- (15)〔四條金吾女房御書(文永八年六七二)〕天照大神は玉をそさのをのみことにさづけて玉の如くの子をまふけたり。然間日の神我子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名けたれ。(文)

此書には例話として國神を出したのではあるが又、日月—蓮華—日蓮—天照—日神の神秘的關聯の暗示のあるによつて神秘的因縁釋の最初をこの御書に置き得るであらう。

(16)〔月滿御前御書(文永八年六七八)〕此國の主八幡大菩薩は卯月八日にうまれさせ給ふ。娑婆世界の教主釋尊も又卯月八日に御誕生なりき。今の童女又月は替れども八日に生まれ給ふ、釋尊八幡のうまれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知ず、……念頃に十羅刹女天照太神等にも申て候。(文)

前書は懷胎の報によつて符を與へ、今書は安産を聞いて喜を敍べてゐる。前書に例話的に太神の名を出し、今書には八幡を主として同じく神秘的な説示を爲してゐる。然し後段に太神を擧げたのによつて、神の次第はあつても二神について同様に考へてゐられたことは明である。即ち國神として更に神秘的因縁的意義が加へられて來たのである。

(17)〔一昨日御書(文永八年六八八)〕是偏爲身不述之、爲君爲佛爲神爲一切衆生所令言上(文)也。(文)特に爲神の一句は(9)(10)等の日本守護の諸大善神と相應し、正しくは天八の二神を指すものである。

(18)〔此經難持十三箇秘訣(文永八年六九六)〕佛者本地神者垂迹故。(文)一般的に佛本神迹をいふのみ。

(19)〔開目鈔(文永九年七五四)〕天照大神正八幡山王等諸守護の諸大善神も法味をなめざるか、國中を去り給かの故に。惡鬼便を得て國すでに破れなんとす。(文)

又、(七七四)〔諸天等の守護神は佛前の御誓言あり、法華經の行者にはさる(獲)になりとも……(文)(眞蹟焼失)〕前文は日本國家守護の善神として二神山王等を擧げたれども、次の文よりすればその守護神は即ち法華正法の行者を守護する諸大善神である。聖人に於ては國神たると正法守護の善神たるとは同一義であるのである。

(20)〔眞言諸宗違目(文永九年八五八)〕如是大惡梵釋猶難防欺、何況日本守護○神也。(文)

梵釋と國神との大小を相對してゐる。しかし國神即行者守護なる點は、次の「必假心固神守即強」と引くによつて明である。

- (21)〔如來滅後五百歲始觀心本尊鈔(文永九年 九四八)〕此時地涌千界出現、本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國。(文)(眞蹟在中山)

引文に止めてその意義の検討は後章に譲る。

- (22)〔諸法實相鈔(文永十年 九六〇)〕釋迦佛多寶佛十方の諸佛菩薩、天神七代地神五代の神々、鬼子母神十羅刹女、四大天王梵天帝釋閻魔法王、……(文)〕

行者守護の諸佛諸神を列ねたのであるが、諸神の列次が他と異つてゐる。多くは梵天帝釋日月四天の成句を爲し、その次下到天八の二神等國神を列してゐる。又「鬼子母神十羅刹女」と併せ出した御書はこの書の外、經王書(九八六)日女御前御返事(一六二五)に二例あり、下山消息(一五八七)には逆に「十羅刹女鬼子母神」とある。その他は殆んど十羅刹女のみを出すやうである。日女鈔(一七三〇)を參照せよ。

- (23)〔顯佛未來記(文永十年 九七五)〕諸天善神竝地涌千界等菩薩守護法華行者、此人得守護之力以本門本尊妙法蓮華經五字令廣宣流布於閻浮提歟。(文)〕

前引本尊鈔と全同の意義を有し、加ふるに諸天善神の守護を明瞭に表はしてゐる。後論に譲る。

- (24)〔彌源太殿御返事(文永二年 一〇三四)〕日蓮は日本國の中には安州のものなり。總じて彼國は天照大神のすみそめ給し國なりといへり。かしこにして日本國をさぐり出し給ふ。あはの國御くりやなり。しかも此國の一切衆生の慈父悲母なり。かゝるいみじき國なれば定て故ぞ候らん。いかなる宿習にてや候らん。日蓮又彼國に生れたり。第一の果報

なるなり。(文)」

(15)の四條書、(16)の月滿書に見えたる神祕的因縁釋はこの書に來つて更に明瞭に本因縁の解釋を遂げ來つて日本―日蓮―天照の關係に於て本尊鈔・顯佛記等に顯れたる本國土と結合さるべきものとなつた。即ち是れを本因縁的解釋と呼ぶべきものであらう。法華取要鈔の一篇の旨趣は又この一貫の理路の中に收めらるべきである。

(25)「異體同心事(文永二年 一〇五五) 一一に承りて日天にも大神にも申上て候ぞ。(文)」

(26)「四條金吾殿女房御返事(文永二年 一〇八二) 釋迦佛法華經日天の御まへに申上候。(文)(眞蹟斷片)」

(27)「富木殿御返事(文永二年 一〇八七) 此帷をきて日天の御前にして此子細を申上ば、定めて釋梵諸天しろしめすべし。(文)

(眞蹟在中山)」

上引の三文中の(25)は年次について異論あるも文永一一より一二、建治元年頃の御書とするに(26)(27)の二書と類同するに差支はない。三書は要するに日天の信仰である。(24)彌源太書の天照太神の本因縁に約する神觀と、後に明瞭なる撰時鈔の日天、神國王書の日神、報恩鈔の天照―日本―日種の信仰と比較するとき文永九年の本尊鈔より次第に本因縁的、本國土的、國神觀の次第に明瞭なるを見出すことが出来るであらう。今上引の三書を日天信仰の方面よりする擡頭と見たいのである。委説は後に譲る。尙次引の新尼書も比較すべきである。

(28)「新尼御前御返事(文永二年 一〇九二) 安房國東條郷邊國なれども日本國の中心のごとし。其故は天照大神跡を垂れ給へり。……日蓮一闍浮提の内日本國安房國東條郡に始て此の正法を弘通し始たり。(文)」

安房東條と聖人、天照太神と東條との因縁は正法弘通の本國土としての「第一本尊可立此國」(本尊鈔)「佛法必可出自東土日本」(顯佛記)「本門三法門建立之」(取要鈔)といふ所以である。

(29) 「兄弟鈔」(文永二年) 應神天王と申す今の八幡大菩薩これなり。(文) (眞蹟散在玉澤池上等) 池上兄弟への教訓として、二皇子の例話が擧げられてゐる。

(30) 「撰時鈔」(建治元年) 日本國と申は天照大神の日天にてましますゆへなり。(文) (眞蹟在玉澤) 慈覺の日輪を射るの夢を破して、日本―日天―天照―日種の本因縁信仰を披瀝されてゐる。即ち日本守護の太神である。

(31) 「高橋入道御返事」(建治元年) 隱岐法皇は人王八十二代神武よりは二千餘年、天照大神入かわらせ給て人王とならせ給。(文)

又、(一二八五) 「日本國の王となる人は天照大神の御魂の入かわらせ給王也。(文)」守護といはんよりは國の主としての大神である。

(32) 「乙御前御消息」(建治元年) 利生あるならば、今の八幡大菩薩といははるるやうにいはうべし。(文) 八幡大菩薩の利生顯著を祝はれた文意である。正八幡は當代に於ては、大神を除いては尤も威光勢力強盛の神とせられてゐる。

(33) 「神國王御書」(建治元年) 地神五代の第一は天照大神伊勢大神宮日神是也。(文)

又(一三四九)、「第十六は應神天皇仲哀神功御子今の八幡大菩薩也。(文) (眞蹟在京妙顯寺)」

右二文は説明以外に意義はないが「日の神」の語に注意を要する。撰時鈔(一二三三)と同意である。

又(一三五三)、「神と申は、又國々の國主等の崩去し給へるを生身のごとくあがめ給う。此又國王國人のための父母也主君也師匠也、片時もそむかば國安穩なるべからず。(文)」

又(一三五四)、「其上神は又第一天照大神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の三千餘社、晝夜に我國をまほり朝夕に國家を見そなわし給……其上八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり。(文)」

又(一三六二)、「天照大神の内侍所も八幡大菩薩の百王守護の御ちかいもいかで叶はせ給べき。(文)」

已上の三文何れも日本守護の二神を出す意趣である。但し大神を國家の本主神とし、大菩薩を殊に國王守護の神とする。國家の主神と國王守護の神明とに分つのである。此書全體の旨趣は我國土を正法流布佛神守護の國となし、それにも拘らず王法に盛衰ある源由を究めて正法に違背するに在りとする。然れどもその究極の所詮は聖人の法華經の行者なるを顯し、佛神の必ず守護あるべきを促されたのであるから、その間の推論は要するに正法守護の神佛たるを顯すにある。故に「三界の諸王は皆此の釋迦佛より分ち給ひて諸國の惣領別領等の主となし給へり」(一三五三)の大小分別は所詮の旨趣ではなくて能詮の論道である。本體的論述ではあるが、目的論旨ではない。此點種々御振舞鈔諫曉八幡鈔等と同致の御書として拜すべきである。併し本因縁的解釋としての神觀と背馳するものではない。

(34)「種々御振舞御書(建治二年 一三八六)天照大神正八幡宮の僧について、日本國のたすかるべき事を御計のあるかとをわ
るべきに。(文)」

これは日本守護の神明としての文である。

又(一三九二)、「八幡大菩薩に最後に申べき事ありとて馬よりさしをりて高聲に申やう。いかに八幡大菩薩はまことの神か……まづ天照大神正八幡こそ……(文)」

この段は法華經守護の大菩薩としての文である。

又(一四〇四)、「天照大神正八幡などと申は此國には重すけれども梵釋日月四天に對すれば〇神ぞかし。(文)」梵釋等と對比して大小を判じてゐる。これは佛神本迹説と殊り、法華經會座の列衆の高下(是二)大小中邊の國の差別に伴ふ上下(是二)の區別である。然しながらこの區別は本迹説と同じく何等か特殊の所論を強調する時常に用ひらるゝところである。この書及神國王書の如き、神明の大小を分ちこれによつて行者の守護若くは日本守護を要請せんとするのである。

又(一四〇四)、「天照大神正八幡宮も頭をかたづけ、(文)」

法華正法行者の守護を促す文意である。

又(一四〇七)、「隱岐法皇は天子也、權大夫殿は民ぞかし。子の親をあだまをば天照大神うけ給なんや。所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用あるべしや。(文)」

大義を明にし日本守護の本義を説く、この書成立について議論の存するあるも、その二神觀は神國王書、諫曉八幡鈔等と同系に屬し、特殊の所顯を必要とするが故に、その論述に神の大小を云云するのである。

(35) 「光日房御書(建治二年一四一六) 梵天帝釋日月四天はいかになり給ぬるやらん。天照大神正八幡宮はこの國にをはせぬか。(文)」

法華行者守護と日本守護とを兼含した文意であつて、御振舞鈔の如く大小等の價值分別はない。

(36) 「南條殿御返事(建治二年一四三六) 八幡大菩薩は日本第十六の王。本地は靈山淨土に法華經をとかせ給ひし教主釋尊なり。(文) (眞蹟在大石寺)」

本迹説にして正法守護を兼含する。但し大小上下の觀念がないから在滅相對の本迹といふべきであらう。回向功

德鈔に「我滅度後の末法の中に於て大明神と顯れて衆生を利益すべし。……されは明神と申すは諸佛如來の御神也」といふと同一意義であらう。

(37)〔報恩鈔(建治二年 一四九一)〕神をば天照という、國をば日本という。又教主釋尊をば日種と申す。(文)(眞蹟燒亡)

前に(30)撰時鈔を引けり、今この鈔を引く前後相映すべし。

(38)〔四信五品抄(建治三年 一五四三)〕天照大神正八幡等久住守護神失力、梵帝四天去國已爲成亡國。(文)(眞蹟在正中山)

日本久住の守護神としての二神は梵釋に超えてゐるのである。「佛法漸廢王法次第衰」と説く聖人は、やがて王佛冥合、廣宣流布を確信する聖人であると知らば、「失力」、「去國」は一旦の警策であることは勿論である。

(39)〔四條金吾殿御返事(建治三年 一五四七)〕天照大神正八幡山王等に一一に御いのりありき。(文)

眞言天台僧等の承久の祈禱を敍した文である。

(40)〔下山御消息(建治三年 一五六四)〕今生には守護國土の天照大神正八幡等にすてられ。(文)

又(一五六九)、「此國既に梵釋日月四天王等の諸天にも捨てられ、守護の諸天善神も還て大怨敵となり。(文)」

又(一五七五)、「御起請文を見るに梵釋四天天照大神正八幡等を書のせたてまつる。(文)」

又(一五八八)、「日本守護の天照大神正八幡等もいかでかかゝる國をばたすけ給べき……日本國の諸神ども四天王にいましめられてやあるらん。(文)」

上掲の四文、その骨子は守護國土の二神である。第二は梵釋も亦守護日本の神である。但し第四文の如く大小その威神力を異にすと考へられる。併し第三文の貞永式目の起請文を出して聖人が特に起請文になき天照大神を擧げて、二所・三島・天満等を略されたのは、當代の鎌倉武家等の過誤を訂正し、日本最高の神として天照大神を尊崇

された眞意を知らなければならぬ。又「梵天帝釋四大天王」について「日本六十餘州大小神祇」を勸請せる式目の敍列は當代の常識的順序であつて、聖人も亦恒にこの敍列を取られたが、必ず「日月二天」を四天王の上に添加勸請された聖人の意圖は、又撰時報恩等の御書に顯著なる、日本の特質を顯し以て王佛の冥合を表顯せらるゝにありと考察される。

(41)〔賴基陳狀(建治三年 一六一四)〕天照大神正八幡百王百代の御誓やぶれて……天照大神正八幡も力及給はず。(文)

梵釋との大小觀、二神の日本守護、正法治國、王佛の盛衰が說かれてゐる。

(42)〔彌三郎殿御返事(建治三年 一六二〇)〕今此三界……此文の意は今此日本國は釋迦佛の御領也。天照大神八幡大菩薩神武

天皇等の一切の神國主竝に萬民までも釋迦佛の御所領の内。(文)

慈悲救護の釋迦は精神的救済主である。これを以て不忠といひ、不遜といふ非難ありとせば、あまりの狹量である。況んやこの書は彌陀の無縁を主張するを眼目とするに於てをやである。次文に「日本國にすみながら」云云の文によつても聖人の眞意大忠にあるは明瞭であらう。

(43)〔日女御前御返事(建治三年 一六二五)〕されば首題の五字は中央にかかり、四大天王は寶塔の四方に坐し。釋迦多寶本化

の四菩薩肩を竝べ、普賢文殊等舍利弗目連等坐を屈し、日天月天第六天の魔王龍王阿修羅、其外不動愛染は南北の二方に陳を取り。惡逆の達多愚癡の龍女一座をはり。三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等。加之日本國の守護神たる天照大神八幡大菩薩天神七代地神五代の神々。總じて大小神祇等體の神つらなる其餘の用の神豈にもるべきや。……此等の佛菩薩大聖等總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人もれず。此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申也。(文)

直接本尊中の國神を説明せる御書として第一に推さねばならぬ御書である。よつて委細に考察して見るに、冒頭の「首題の五字は中央にかゝり」は中尊を標高し第一に掲げたのであるが、第二句に「四大天王は寶塔の四方に坐し」とあるは、大に他と趣を異にする。寧ろ第三句已下に在るべきであるのに、中尊に續いて第二句に据えたのは四大天王は釋迦多寶等の十界諸尊の勸請と別趣あるを思はしめる。第三句已下佛界、本化、迹化、二乘、天龍、修羅を順次これを列ね、「其外不動愛染は」の一句は稍意趣を別にし、次で地獄の提婆、畜生の龍王を列し、更に餓鬼界たるべき鬼十二神を出す、地獄畜生餓鬼の列次の不順なるは鬼十二神の本尊上の位置の不順なると照合して勸請意趣に別意あるを思はしむる。最後に「日本國の守護神たる天照大神八幡大菩薩」を出すは、山川師もいはるゝ如く、十界勸請の外に明に「日本國守護」の勸請意趣を有するものである。本書列尊の中にその勸請意趣を明示されたのは國神のみである。鬼十二神の「三千世界の人の壽命を奪ふ」とあるは勸請意趣ではない。たゞ列衆の中に人界を欠くが故に「加之」の以下を以てこれに充てると考へられないこともないが、「其外」「加之」の簡別の語は不動愛染・天八兩神の勸請に別趣あるものを見るべきであらう。人界は二界八番中に攝在するのであらう。本尊全體が悉く本有尊形として妙法光明裏の本佛體なることは勿論であつて、この義を以て二神の國神としての勸請義を無視せんとするは誤りである。

- (44)〔三澤鈔(建治四年一七〇六)〕神は所從なり法華經は主君なり八幡大菩薩の百王のちかいもやぶれて。(文)(眞蹟在京妙覺寺)〔(33)神國王書(一三五三)、(34)振舞鈔(一四〇四)等と同例にして、「法華經」に釋迦佛を置換へ得る文意であらう。併しこの鈔も神佛の參詣の前後を指摘して信仰の有無を責められた御書であるから意義に於ては特例に屬するものである。〕

(45)〔檀越某御返事〕(弘安元年 一七一八) 願くは法華經のゆへに國主にあだまれて今度生死をはなれ候ばや。天照大神正八幡日月帝釋梵天等の佛前の御ちかい今度心み候ばや。(文)(眞蹟正中山)

諸神の順位が常に梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩とある排列に殊るのは、前文の「國主にあだまれ」の文に對應して國神として先づ天八二神を列したのであらう。「佛前の誓」は、法華正法守護の義を表はしてゐるのである。

(46)〔窪尼御前御返事〕(弘安元年 一七二七) 日蓮はいやしけれども經は梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩のまほらせ給御經なれば。(文)(眞蹟上半分在保田妙本寺)

正法守護の諸神として排列の順序は一般例である。

(47)〔日女品々供養〕(弘安元年 一七三一) 三代の國王は心には佛法釋迦如來を信じまいらせ給ひてありしかども、外には國の禮にまかせて天照大神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども。(下略)(眞蹟斷片京本能寺)

國神として天照大神熊野權現を出すも、神佛の信を比較して信仰を勸進するを目的としてゐる。よつて神佛の輕重が稍強く表現されてゐる。

(48)〔治病大小權實違目〕(弘安元年 二一〇一) 王始て天照大神等の神を國々に崇めしかば疫病やみぬ。故に崇神天皇と申(文)(眞蹟在正中山)

弘安五年説もあるが今は弘安元年に従つて系年する。

(49)〔千日尼御前御返事〕(弘安元年 一七五五) 月氏漢土日本國のふるき神たちも皆其座につらなり給し神々なり。天照大神八幡大菩薩熊野すずか等の日本國の神々もあらそひ給べからず。(文)(眞蹟佐渡妙宣寺)

法華の最第一なることは如來の金言にして、その聽衆たる諸聖諸天の齊しく聽くところなりとの文意である。日本守護の神々を又同時に正法擁護の神なりとするのである。

(50)〔妙法比丘尼御返事（弘安元年一七七四）〕此日本國の一切衆生のためには釋迦佛は主なり師なり親なり。(文)〔

今此三界皆是我有の說意である。(33) 神國王書の下往考。

又(一七七六)、「天照大神正八幡等の天神地祇十方の三寶にすてられ奉りて。(文)〔

又(一七七七)、「かゝる大料ある故に、天照大神正八幡等の天神地祇釋迦多寶十方の諸佛一同に大にとがめさせ給故に。(文)〔

二文は神佛俱に日本を守護し給ふ、正法を失ふが故に神佛の守を失ひ、又は戒責を蒙るとする。故に第一文は一般的意義であり第二第三の二文、即ち國家守護を當文の意義としなければならない。神佛の排列も此意からなされてゐる。

(51)〔日眼女造立釋迦佛御供養事（弘安二年一八三〇）〕御守書てまいらせ候。三界主釋尊一體三寸木像造立檀那日眼女……法

華經壽量品云或說己身或說佗身等云云。東方の善德佛中央の大日如來十方の諸佛過去の七佛三世の諸佛。上行菩薩等文殊師利舍利弗等。大梵天王第六天の魔王釋提桓因王日月天明星天北斗七星八萬四千の無量の諸星。阿修羅王天神地神山神海神宅神里神。一切世間の國々の主とある人。何れか教主釋尊ならざる。天照大神八幡大菩薩も其本地は教主釋尊也。例せば釋尊は天の一月諸佛菩薩等は萬水に浮る影なり。釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり。……日本國と申は女人の國と申國也。天照大神と申せし女神のつきいだし給る島也。(文)〔この書は上に於ける二神の説明としては(48)日女鈔(一六二五)に次で直接的である。御守とは一種の漫茶羅で

あつたであらうことは疑へない。その勸請に於て佛、菩薩、二乘、諸天、修羅、神、人王の次第によつてゐる。

天照大神八幡大菩薩はその列順に於て稍別趣あるは文言によつて又明瞭である。然れども一括してその「本地は釋尊也」は一同に冠する意であることも確である。たゞ「何れか教主釋尊ならざる」と一度總括して更に二神の本迹を説けるは、二神の勸請意趣が前來の諸尊と殊りあるを表示されたのであると考ふるに無理はあるまい。殊に日眼女との關係に於てあるとは云へ、天照大神を特出して「日本國と申は女人の國」云云とある聖意は何等かの底意あるものと推察されるのである。故にこの書を以て本迹説のみによる十界羅列なりと論斷するは未だ祖意を得たるものではない。日女鈔の「本尊の光明」に同被すると此の書の「一月萬影」とは法體的一般的説明であつて、二神の特殊的因縁的勸請意趣は日女鈔の「加之」とこの書の特記と同義を成すものである。

(52)〔曾谷殿御返事（弘安二年一八七〇）〕天照大神はたましいをうしなつてうちごをまほらず。八幡大菩薩は威力よはくして國を守護せず、けつくは佗國の物とならむとす。（文）

又（一八七二）、〔今梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩、日本國の三千一百三十二社の大小のじんぎは過去の輪陀王のごとし（文）〕

前文は正法の味を嘗めずして、國神去るの意にして國家守護の二神、後文は輪陀王に比して正法行者守護の意である。聖人に於ては結句二意は一に歸するのである。

(53)〔聖人御難事（弘安二年一八七五）〕去建長五年太歲癸丑四月二十八日に、安房國長狹郡之内東條の郷今は郡也。天照大神の御くりや右大將家の立始給日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此郡の内清澄寺と申寺諸佛坊の持佛堂の南面にして午時に此法門申はじめて今に二十七年弘安二年太歲己卯なり。（文）

又(一八七七)、「設い大鬼神のつける人なりとも日蓮をば梵釋日月四天等天照大神の守護し給ゆへにばつしがたかるべしと存給べし。(文)(眞蹟正中山)」

已上の二文は(24)彌源太書、(28)新尼書、(30)撰時抄等々の本因縁を説き、佛法西漸を説く御書と一連のものと考察すべし。

(54)〔中興入道御消息(弘安二年一九二三) 日蓮はいやしけれども所持の法華經を釋迦多寶十方の諸佛梵天帝釋日月四天龍神

天照大神八幡大菩薩、人の眼を眩(惜)しむがごとく……まほり於もんじ給ふゆへに。(文)〕

(52) 聖人御難事(一八七七)と同例。

(55)〔秋元御書(弘安三年一九三三) 天照大神正八幡に被捨給て。(文)〕

國神としての二神である。

(56)〔慈覺大師事(弘安三年一九四二) しかれば此等の人人は釋迦多寶十方の諸佛の大怨敵、梵しやく日月四天天照大神正八

幡大菩薩の御讎敵なりと見候ぞ。(文)(眞蹟正中山)〕

正法守護の神明である。

(57)〔上野殿母御前御返事(弘安三年一九九九) 此經を持つ人をば、いかでか天照大神八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給

べきとたのもしき事也。(文)(眞蹟小泉、北山)〕

正法行者守護としてあるが、上野殿の所在地の關係を以て「富士千眼」を掲げ、淺間を特に「千眼」として帝釋に關係づけた點が注目される。

(58)〔四條金吾許御文(弘安五年二〇一一) 八幡大菩薩をば世間の智者愚者大體は阿彌陀佛の化身と申候ぞ……其實には釋迦

佛にて於はしまし候ぞ……我朝の守護神……八幡大菩薩の御誓は、月氏にては法華經を説て正直捨方便とならせ給ひ、日本國にしては正直の頂にやどらんと誓給ふ。……されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給とも、法華經の行者を見ては争か其影をばをしみ給べき。(文)

國神義、本迹義、正法守護等の諸義が顯れ、神天上の義を論じて正法の存する處には神亦在りとせられてゐる。八幡宮の焼失に因みて書かれた御書で、天照大神の御名は出してゐない。

(59)〔智妙房御返事(弘安三年 二〇一六) 八幡大菩薩は……釋迦佛の化身と申事はたれの人かあらそいをなすべき。(文)(眞蹟正中山)〕

前引(57)四條書と同例八幡宮炎上に因んで神天上を説き、彌陀化身説を破し、正法守護を主張するものである。

(60)〔諫曉八幡鈔(弘安三年 二〇二一)(眞蹟在大石寺)〕

この書は前引の(58)智妙房御返事、(57)四條書と三書同趣、鎌倉八幡宮炎上に因つて、共に同年十二月、正法守護の八幡大菩薩なるを明にした御書である。全文を通讀する要があるから引文を略した。たゞ二三注意すべき點を舉ぐれば伊勢大神宮の名を一所に出して日本最高神として八幡宮の上位なるを明瞭にせられたこと。(二〇三〇)(是二)「八幡大菩薩は正法を力として王法を守護し給ける也」(二〇三二)の言が聖人の國神觀なること(是二)。八幡諫曉の義を説いて(二〇三三已下)大願成就にあるを示し(是三)。本迹觀が同體説にまで進みて從來の佛本神迹説已上にあるやに思はるゝ點(二〇三九)が此書も前引の智妙房御返事、四條書と同様である(是四)。三書俱に釋迦八幡の降誕入滅の月日の因縁を説ける(是五)。最後に佛法西漸を説いてその根本として「教主釋尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや」(二〇四〇)といへる(是六)。これ等の全體を通じて聖人の神觀が大國小國・大神小神

等の比較によつて國神を下すの意は決してそのまゝに受取るべきではなく、佛法西漸の國日本の最高神としてその大願成就を起請された底意を知悉しなければなるまい。所謂付文と元意とを明め眞意を誤る莫らんことを希ふものである。

(61)〔曾谷二郎入道殿御報(弘安四年二〇六〇) 天照大神八幡大菩薩爭守護此國。(文)〕

この外續集にも二三の御文がある。新池書(七)、八幡宮造營事(八〇)、現世無間御書(一五八)等である。但だ今は慧日天照御書(九四)の「釋迦佛の御名をば幼稚にては日種という。長大後異名をば慧日という。此國をば日本という。主をば天照申」の一文を上げ、(37)報恩鈔(一四九一)と同意であることを指摘するに止めやう。

三、教義的分野より

御遺文の個々について解説し、大體の國神觀を述べたが、更に二三の觀點から綜合的に考察して見たい。

(イ) 御書に於ける二神の初出

二神の御名の御書上に出づる最初を、(2)安國論廣本、(3)行者佛天守護鈔、(7)聖愚問答鈔の系年或は其他に異論あるを除いては、(8)安國論御勘由來の文永五年に置くを確實とする。これは全年の蒙古腰狀と關聯して大に意義が認められるが、根本的には宗祖の大廟社參の事實と併せ考へなければならぬ問題でもある。八幡社頭の諫曉は遺文によりて證明せられ、化導記等にも出てゐるが、大廟社參は別頭高僧傳已前にはあまり明瞭ではない。しかしこれによつて開宗已前にその事實無しと斷定し得ないことは勿論であり、社參の有無によつて宗祖の大神尊崇の事實を否定し得ないことも明瞭である。しかし史的に若くは教義的に研究すべき或ものを残すであらう。少くとも二神御名の初出

を確實にすることは宗祖の神觀の基礎を一層確實になし得るであらう。但し正元元年の念佛者追放宣狀事（二七五）に山門奏狀の「一向專修黨類向背神明不當事」に「所謂伊勢大神宮八幡加茂日吉春日等皆是釋迦藥師彌陀觀音等之示現也」の文を出すを數ふれば尙早期に御名を發見するのであるが、これは宗祖の御文ではないから區別するが妥當であらう。しかし當代の神觀として（40）下山御消息の下に論じた武家の國神觀と比較して興味がある。

（ロ） 彌陀本地説に對する本迹説

宗祖の神佛本迹説は、多くは彌陀本地説に對する釋迦本地説であつて、神に對してその本迹體用を主張するが正意ではない。特に文永五年御勘由來以前のそれは法然破の爲めに主張せられたる釋尊本地説である。（5）（58）等即ち彌陀に對する釋尊であつて、神に對する釋尊を主張するを目的としたのではない。この間の區別は大に必要である。又念佛者の神明否定に對して大に日本神國説を主張したのは（2）（4）（7）、法然に對する舊佛教徒に同じてはゐるが、（二七四參照）同時に宗祖が神國説を強調するところ、釋尊本地説を主張する眞意が彌陀對破にありといふことが證せられやう。但しこの意義に於て又この時代に於ては、應身釋迦に對する本迹觀であると考へるを至當とする。「正直の頭に宿る」云云の語は次第に變化して又一種の本迹説をなした。法華經—正直の關聯に於ける法身釋迦の意義をなしたのである。即ち正法正義の顯現を神明とする本迹説であつて、體用本迹觀として、前の彌陀本地説若くは釋尊本地説の在滅本迹觀と區別して考ふべきである。

（ハ） 善神拾國の意義

（8）安國論御勘由來の下に述べた如く、聖人の眞意は日本守護の反顯的強調に在る。安國論に於て「去國捨所」とある語が文永五年の御勘由來には、牒狀到來によつて威光失墜、國土捨了の確定となり、次第に國神の守護國家を強

調して弘安の夕に到るまで増と強訴を續けられたのである。

(二) 守護の意義

日本守護、正法守護(法華經守護)、法華行者守護、叡山守護等の表現が用ひられてゐるが、用語の不同はあるが、その相違は横の約從の相違か、或は縦の史的理山によつたので、聖人の眞意若くは目的に於ては同一であり同趣である。(3)(9)(52)(54)(58)等々照合。

(ホ) 因縁釋と本體釋

本迹觀に體用、在滅の二相對があること前述の如しであるが、兩者共に本體的解釋と見るべきである。即ち神の本質的説明、神格の本體的位置を規定するものである。しかしながら在滅相對或は在末相對の場合は應身佛を本地と考ふる所謂久近本迹に屬するものである。若し宗祖に於ける本體的解釋とせば、體用本迹相對して三身相即佛、本覺本地佛と相對して本迹をいふので法身格に對する本迹であるべきである。前述の如く宗祖の初頭に於ける本迹説は多くは彌陀對破の在滅本迹釋に外ならないものであるが、後來の解釋は同じく本迹の釋を用ひるも體用本迹に約する邊が強い。この二の本迹説は宗祖の御書上に初より終りまで一貫して發見し得るものであるが、これを以て直に宗祖の國神勸請の意義なりとするは早計である。それは從來の本迹觀の踏襲か或は一般的基礎的説述としてあつて決して宗祖の獨自のものでもなく、從つて又宗祖の國神勸請の意義でもない。舊來の本迹説を脱化した宗祖獨自の本迹説がある。これが即ち國神勸請の意義であつて、本因縁的信仰が即ちそれであると信ずる。一往は本迹釋と因縁釋と對立するものではあるが、宗祖の本因縁的解釋は即ち高次的本迹釋であるところに國神勸請の眞意義は發見されるであらう。

四、歴史的觀點より

文永五年の頃より蒙古牒狀に伴ふ捨國の強調は、六年の法門可申に至つて弟子への特別書とはいへ謗國の呵責が御勘山來以上である。茲に宗祖の舊來の對法然の神國說、若くは在滅本迹說に變化を生ずる轉機がある。次で文永七八年の(15)四條書、(16)月滿書に見ゆる日神觀を兆として、佐渡流罪本地開顯本法宣揚の壇場を経て、(24)彌源太書に具體的因縁釋が明にされたのである。即ち文永十一年の(24)彌源太書に次で全年の(25)異體同心書、十二年の(26)四條書、(27)富木書、(28)新尼書等、佐渡顯正に續く文永十二年の御書は皆この發表である。これを開目、本尊兩鈔及び(23)顯佛記、法華取要鈔と連關して考ふるとき一貫の思想信仰の連鎖としか考へられない。佐渡より延山の初に涉る、顯正的發表は正く宗祖の國神觀の發表であると考へられる。他の理由によつて條件づけられないものである。換言すれば時代的條件、人的條件、教義的條件等々によつて説明の上に特殊を要する點の少しも無い純粹顯正であるといへる。故にこの間の御書を中心として勸請意義を決定するが尤も妥當である。況んや曼荼羅圖に隨伴してこの時に正しく説明解釋が施さるべきであるからである。曼荼羅の圖出に於ては圖樣構想構圖について實際的具體的問題として弘安に至つて一切が決定されたことは當然であるが、思想若くは解說として御遺文上の發表は、實際的圖出曼荼羅に先行するは當然である。又これが反面宗祖の曼荼羅上の圖様に年代的變化はあつても、本來二神の勸請位置は要請されたる特別位置の存したことを證明するものである。この點は曩に大崎學報誌上に指摘しておいた如くである。即ち文永八九年より十一年頃の御遺文上の二神の説明が、曼荼羅上に於ては遅れて弘安に到つてその勸請位置が決定されたのである。加之この思想解釋は建治弘安を通して(30)撰時鈔、(37)報恩鈔、(53)聖人御難事等

重要御書の大綱であることは特に注目される。

建治元年の(33)神國王書より「日の神」等の語はあるが、一面神の大小、上下、主従等を強言して、やゝ舊來に異るものがあるやうである。建治二年の(34)振舞抄、弘安三年の(60)諫曉八幡抄等がその一聯に屬する。九月元使を刎ね、十一月九州探題北條實政を派した、建治元年の末頃は、日本神家存亡を賭した秋であつた。聖人が、日本守護の善神に強訴し諫曉し來るは決して唐突のことではない。しかしながらこれを以て文永七八年より文永の終までの國神觀と背馳するものではない。たゞ文永末の顯正的態度と建治に入つて一面を流るゝ反顯的態度との相違に過ぎないのであらう。

五、文獻的見地より

大まかに五大部を中心として考察して見るに(2)立正安國論は且く廣本によるに二神の名を出し、念禪の神祇輕視を呵責せられ、(19)開目抄には二神を日本守護行者守護の善神と崇められてゐる。(30)撰時抄、(37)報恩抄の二抄に至つては明瞭に本因緣的解釋に於て完全に一致する。これを(21)本尊鈔の「可立此國」の國と併考へるに、國神は即ち本尊建立の國土の最高守護の二神として勸請されたといふことに疑義はない。其他の諸御書も五大部に湊合せしめ、本尊鈔に朝宗せしむるに於て、大曼荼羅に圖出せる二神勸請の意義は明らかではあるまいか。

彼の(43)日女鈔、(51)日眼女鈔の二書は直接的に大曼荼羅勸請の相を説明せる御書として或は五大部中心の勸請意義と合致せざるやに感ぜらるゝも、その條下に説明せる如く二書共に二神の勸請意義に別趣あるを示すもので、寧ろ二神の座配勸請に於ては特殊の表現を以て本佛十界體用本迹の説以外に本因緣的二神勸請の意義を明にしてゐること

は二書の下の解説を見られたい。況んや本尊鈔等五大部に對してこの二書を以て是非を決せんとするが如きは文獻的にも教義的にも又史的觀點よりするも不能の事に屬する。

之を要するに御書上に於て、やゝ不一致と感ぜらるゝ二神觀も究極するところ、大漫荼羅坐配に現れたる宗祖の圖顯せんとせられたる意義と全同であると信ずる。

(執筆中身邊多忙の事情と手痛の爲め本論後半段は全く草忙の筆、説明欠略、文意不通、幸に諒とせられんを希ふ。)

(昭和十三年十一月廿四日)